# 新町{暮らシック}Car まちなか博物館

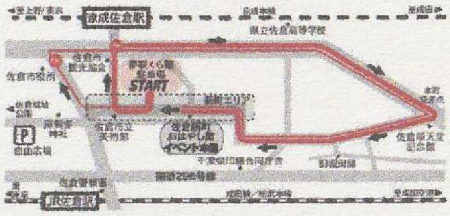
Classic

2022. Shinmachi, Sakura

2022.12.3(土)

10:00~15:00 | Parade 10:30~11:30 13:30~14:30

荒天中止



主催：佐倉城下町商店会　協力：さくらモータークラブ●　後援：佐倉市・佐倉商工会議所・公益社団法人佐倉観光協会


# ドラゴンへの階段　第㊸回（連載エッセイ版）

## 「人生の、浮いていてよく見える表面の部分」佐藤　洋祐

SNSソーシャルネットワークサービス、というものがこの世に定着してもう長くなります。私が渡米して間もない頃、アメリカ人のミュージシャン仲間に「ヨースケ、Facebook（フェイスブック、以下Fb）っていう面白いものがあるから、お前もやりなよ」と言われて始めましたから、もう15年くらいは私も自分のページに日々の出来事などを投稿したり、Fb上の友達の投稿を観たり、そういうことを何日かに一度はしています。

ただ一時期、ごく最近までなのですが、1年ほどFbを開くのが苦しくて耐えられない時が、実はありました。世の中がコロナ禍に見舞われたばかりの頃は、人との接触ができませんでしたから、インターネットによる「オンライン」の人とのつながりを維持しようとFbやYouTube、そして今一番若者に支持されているというインスタグラムなども懸命に使って、できることを続けていました。そうこうするうちに世の中もパンデミックに徐々に適応しはじめ、私の生業である生演奏の機会も徐々に戻ってきましたが、そうすると、今度は自分とは関係のないところで楽しそうに写真や動画に映る方々の姿を観るのが疎ましく思えたり、また自分の投稿に対するネガティブな反応に心を痛めたりするようになりました。そうこうするうちに、この社会で音楽家として活動していること自体が不自然に思え、それがこの資本主義の物質至上主義の経済の仕組みの上に成り立っていて、目に見えないところで多くの人々の苦しみや犠牲を糧にこの生活があるのでは、と感じるようにもなりました。

とはいえ、実生活は何不自由なく、幸せに暮らしていましたから、自然にSNSから足が遠のくようになり、ただ「オフライン」の生活、つまり実生活の延長程度にSNSを利用するようになり、Fbからは足が遠のきました。

出雲にお参りしてまいりました。因幡の白うさぎさんたちです。


佐藤　洋祐（サトウ ヨウスケ）
ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。


ちょうど僧侶たちが人里から少しだけ離れたところで修行生活をしながら、時折は町村に出てお布施をもらいながら生活するように、私もSNSから離れ、自分の活動、音楽、人生の意味をじっくり考える機会が必要だったのだと思います。そうこうするうちに、今年2022年の始めに、ある方のお話しを聞き、またある素晴らしい書物と再会することができ、それを何度となく繰り返し読む度に、心の霧や己の目の曇りが晴れていくのを、そして世の中のありのままの姿がなんとなく見えてくるのを感じました。

「浮世（うきよ）」という言葉がありますね。もともとは苦しみに溢れたこの世、「憂き世」だったのかも知れませんが、仏教でいう死後の世界、静謐なあの世と対比して、賑やかな現世を表しているのだと思いますが、うまく言ったものと思います。この浮かれた世界。でもこの世に生まれるあらゆる生はこの浮かれた楽しみを享受したくて、平安の世界から何かを手放してこの世に生を受け、この浮世を謳歌します。でもその狂騒曲ののちには、まるで赤ちゃんがお母さんのおなかの中にいたころのような、もともと居た平安の世界に戻りたい、と思われる方も多くおいでしょう、たとえ浮世の全ての愉しみを手放しても。その人生の全体スケジュールがなんとなく見えると、浮世に身を投じてこの世の表面的な愉しみを味わうことも、そこを離れて心の平安を求めに静かな海の底に身を置くことも、それぞれに意味あることがわかってきます。

なんだか私ごときが悟ったようなことを書いておりますね（笑）！私なりには、これは小さな悟りと思っていまして、ただ小さく悟ったからといって、それが実践できるかと言えば違って、まだまだ迷いから抜け出すためには練習、しかも反復練習が必要です。このあたりはどうやらジャズと同じ、頭でわかっても、生きた音は出てこないのと同様、知恵を得ても、そのように生きられるかと言えば、違うようですね！

さて、こうしてまたSNSの世界にもちょこちょこと顔を覗かせるようになった私ですが、自分なりにそこに現れる意味もわかったのですから、これからは浮いてみたり、沈んでみたり、それをバランスよく繰り返しながらやっていくでしょう。今の若者たちが浮世の世界で存分に経験を積めるような、森の中で若木が上空に向かってどんどん高く伸びていけるスペースをつくるような、大事なもう一仕事をこの浮世でなさねばならんな、と。そんなことを思いながら、晩秋の高い晴れ空を、目を細めながら嬉しそうに眺めています。

（2022年11月10日筆）